

## 冒険キャンプ経験が児童の 一般性セルフ・エフィカシーに及ぼす影響

○関根 章文（筑波大学大学院）

飯田 稔（筑波大学）

キーワード：キャンプ、児童、セルフ・エフィカシー

### 1. 目的

現在、わが国そしてアメリカにおいても、冒険プログラムを含むキャンプの研究としては、自己概念やLocus of Controlを従属変数とした研究が主である（井村，1987）。アメリカのBanduraによって提唱された社会的学習理論では、ある状況において必要な行動を効果的に遂行できるという確信をセルフ・エフィカシー（Self-Efficacy, 自己効力感）と呼んでいる（バンデューラ，重久訳，1985）。そして、個人がセルフ・エフィカシーをどの程度身につけているかを認知することが、個人の行動変容を予測する要因として有効であるとされており、キャンプの研究においても従属変数として有効であると考えられる。

セルフ・エフィカシーには、2つの水準がある。1つは、直面する特定場面において個人が特定の状況を克服しようとするか否かに影響を与える短期的なものであり、もう1つは、個人がいかに多くの努力を払おうとするか、嫌悪的な状況にいかに長く耐えることができるかなどに影響を与える長期的なものであり、後者を一般性セルフ・エフィカシーという。

そこで本研究は、冒険プログラムを含むキャンプに参加した児童を対象に、キャンプの前後に一般性セルフ・エフィカシーを測定し、キャンプ経験による影響を明らかにすることを目的とする。

### 2. 方法

#### 1) 被験者

平成2年8月21日から27日に、宮城県花山キャンプ場で行われた幼少年キャンプ研究会主催のキャンプ（6泊7日）に参加した、小学5・6年生48名からなる。

#### 2) キャンプの概要

##### ① 班編成と指導者

参加者は1班6人もしくは7人からなる7班に分けられ、班編成にあたっては性別、学年、経験を考慮した。指導は野外運動を専門とする大学教官および野外運動を専攻する大学院生と大学生があたり、カウンセラーとして各班に1人ずつ配置した。

##### ② プログラム

一般的なキャンプ・プログラムに加えて、班で課題を解決していく仲間づくりゲームやメイン・プログラムである沢登りを含む1泊2日の登山など、冒険プログラムが加えられて構成されている。

#### 3) 調査内容と手続き

坂野と東條(1986)が作成したものを筆者が児童用に修正した16項目、5段階評定尺度からなる一般性セルフ・エフィカシー尺度（以下、GSES）を、被験者に対してキャンプの直前、直後の2回実施した。

### 3. 結果と考察

キャンプ前とキャンプ後のGSEES得点の平均の差についてt検定を行った。その結果、表1に示す通り、キャンプ前よりキャンプ後のほうが0.1%水準で有意に高く、一般性セルフ・エフィカシーが向上したといえる。これは、冒険プログラムをこなしていく中で、セルフ・エフィカシーを獲得する情報となる1)完全遂行、2)代理的経験、3)言語的説得、4)情動的喚起という経験をしたためと考えられる(Harmon, P. & Templin, G., 1987)。

表1 キャンプ前後におけるGSEES得点の変化(全体)

	N	pre-test (SD)	post-test (SD)	t
全体	48	50.92 (9.20)	55.71 (11.43)	-4.07***

\*\*\* p<.001

キャンプ前のGSEES得点の低いものをL群、標準をM群、そして高いものをH群として比較したのが表2である。L群とH群はキャンプ前後で有意な向上はみられないが、M群は1%水準で有意な向上がみられた。また、キャンプ前にはM群とH群の間に有意差があったが、キャンプ経験によってM群がH群と同程度まで向上したことにより、キャンプ後には有意差がなくなった。L群のGSEES得点が向上しなかったのは、無気力・無関心・無感動であったり、また抑うつ状態が強い(坂野, 1989)がため、プログラムに積極的に参加しなかった可能性がある。一方、M群とH群はプログラムに積極的に参加したために、キャンプ後にGSEESを高く示したと考えられる。

表2 キャンプ前後におけるGSEES得点の変化(L・M・H群別)

	N	pre-test (SD)	post-test (SD)	t
L群	14	40.79 (8.51)	45.43 (12.40)	-1.69
M群	18	50.94 (1.43)	57.78 (7.89)	-3.77**
H群	16	59.75 (4.57)	62.38 (7.38)	-1.67

\*\* p<.01

キャンプ未経験群と経験群に分けて比較したのが表3である。キャンプ前には未経験群と経験群に有意差がみられなかったが、キャンプ後には、経験群が0.1%水準で有意な向上をしたために、両群間に有意差( $t=-2.39, df=46, p<.05$ )がみられた。これは過去のキャンプ経験が、今回のプログラムに積極的に参加する要因になっていることが考えられる。

表3 キャンプ前後におけるGSEES得点の変化(経験別)

	N	pre-test (SD)	post-test (SD)	t
未経験群	15	47.53 (9.70)	50.13 (12.87)	-1.73
経験群	33	52.45 (8.68)	58.24 (9.91)	-3.73***

\*\*\* p<.001

### 4. 結論

冒険キャンプに参加した児童は、キャンプ・プログラムをこなしていくなかで、一般性セルフ・エフィカシーを獲得し、向上していくことが明らかになった。特に、キャンプ前的一般性セルフ・エフィカシーの状態やキャンプ経験によって、向上に影響がある。今後、他の従属変数との関係、行動変容との関係、そして個々のプログラムとの関係について明らかにする必要がある。